

風に立つライオン、Dr.コトー、 八ヶ岳の野ウサギ Jr.が地域医療で講演



パネルディスカッションで地域医療が語られた
(10月25日ホテルニュープラザ久留米)

市民公開フォーラム「地域医療を考えるライオン、Dr.コトー、野ウサギ Jr.」(読売新聞西部本社主催、日本医師会後援、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院グループ協賛)が10月25日、福岡県久留米市のホテルニュープラザ久留米で開かれた。3人の医師がアフリカ、離島、山間奥地での「患者に尽くし、地域に尽くす」医療の在り方を語り合った。

取材●藤野博史(医療ジャーナリスト)

人口1000人当たりの医師数が全国トップクラスで「医者のみち」と言われる福岡県久留米市。フォーラムは、その一翼を担う聖マリア病院グループのヘルスケアセンター(井手陸院長)開院を記念して開催され、200人を超す参加者が耳を傾けた。来賓挨拶に立った榎原利則市長は「地域医療を考えるまたとない機会、講師陣」などと歓迎した。

40余年前、シュバイツァーに啓発されてアフリカで医療活動をし、さだまささんの歌「風に立つライオン」のモデルとなった宮崎市の外科医・柴田紘一郎氏(74)、鹿児島県の離島・下甕島の村長から「半年でいいから」と請われて応じ、37年間帰らず漫画・テレビの「Dr.コトー診療所」のモデルとなった外科医・瀬戸上健二郎氏(73)、長野県諏訪市の山間部無医地区巡回診療を祖父と70年間続け、さださんの歌「八ヶ岳に立つ野ウサギ」のモデルになった内科医・故小松道俊氏の長男佳道氏(39)が一堂に会し、地域医療について話し合った。

3氏はそれぞれテーマソングのメロディーに乗って登壇。「長野県諏訪市の山間僻地診療三代目～野ウサギ Jr.走り出す」「島酔い37年～島の人を助きたい」「風に立つライオン～LOVEのたてがみ 生(活)きる力は患者さんから」と題して講演。パネルディスカッション「医の原点～患者さんの生命とここに生きて」でも、持論を展開した。

日本の手足の指先、 山間地を元気にしたい

諏訪豊田診療所(長野県諏訪市)
院長 小松佳道氏

諏訪中央病院の鎌田實名誉院長とともに「野ウサギ」先生のモデルとなった父(前諏訪市医師会長・道俊氏)は2013年5月に亡くなった。その1カ月前、後を継いだ。山間部無医地区巡回診療も始めた。



小松佳道氏

巡回診療は祖父(卓郎氏)が1942年、標高約760メートルの諏訪湖畔から近隣の西山山間部奥地の無医村4地区へ馬に乗って通い、開始した。35年後の77年、祖父が病に倒れたとき、「山の人たちが心配」という言葉に、父はアレルギーの研究をしていた岩手医大講師を辞め、後を継いだ。36年後、父が倒れた時、私も同じ言葉に諏訪赤十字病院呼吸器科副部長を辞め、3代目となった。

4地区で1回の平均受診者数は56人。今年8月の受診者47人は平均年齢が79歳。尋ねると父の診察を受けた人は100パーセント、祖父の診察を受けた人も63パーセントいた。

「日本の国土を人の体にたとえれば、山間地は手足の指先にあたる。その指先が元気と言うことは、この国が元気と言うこと。山の中で頑張ってきて幸せだと思

ってもらえるなら、そのために役に立てるのなら、自分の人生は惜しくない」と父は言った。

「風に立つライオンとまでは行かないけど、八ヶ岳に立つ野ウサギくらいにはなりたいなあ」。鎌田氏との冗談を、さださんが歌にしてくれた。

巡回診療に回る地区集会所などには、小型トラクターや手押し車に乗り、患者が集まってくる。

離島医療の悲劇を打ち切りたい

下甑手打診療(鹿児島県薩摩川内市)
所長 瀬戸上健二郎氏

国立療養所南九州病院外科部長を辞め、開業準備していた78年、「ああいよ」と半年の約束で鹿児島県本土から45キロ離れた下甑島に渡った。当時の人口は4200人。看護婦はたった2人、ベッド6床、麻酔機もない典型的な離島診療所だった。



瀬戸上健二郎氏

いつ、何が飛び込んで来るか分からない離島医療は、まさに本物の総合診療で、離島救急は最も重要。船もヘリコプターも間に合わないことがあるのが厳しいところで、繰り返されてきた離島ゆえの悲劇を打ち切りたいと言うのが村長さんの悲願だった。

島で手術を始めたが、簡単ではなかった。86年、診療所を新築移転し、年中無休、24時間体制となった。手術室を完備し、いつでも開胸・開腹手術できるようにした。90年には人工透析を開始。それまで本土に通っていた人たちはQOL(生活の質)が向上した。96年には



地域医療の先駆者らの話を参加者は熱心に聞き入った

CTを導入した。スタッフを増やし、整備していったが、問題は人材確保や医療機器の整備だけではなかった。手術を任せてくれる最も重要なものは医療の原点と言ってもいい住民との信頼関係だった。腹部大動脈瘤の手術を受けた患者が「命は神様に、病気は先生に」と信頼を寄せてくれた。胃穿孔、乳がん、食道がん、腸閉塞はじめ何でも手がけた。助けられない命もあった。

島の目、島の心で感じ、視点を変えると、島こそ世界の中心と思えてくる。世界各国から離島医療を視察に来た。いつの間にか37年が過ぎていた。

生(活)きる力は患者さんから

前宮崎県立日南病(□□□□□)
院長 柴田紘一郎氏

卒業した長崎大学の図書館の掲額に「医学を学ぶ、科学を学ぶ、そして人を学ぶ」とあった。年を重ねるに「人を学ぶ」の意味が厚くなっていく。人生は生老病死の苦界で互いに助け合い、支え合って生きていかなければならない。それぞれの人がこの世に誕生してきたのは、ある意味、奇跡だ。それ故に使命と付随する夢がある。



柴田紘一郎氏

子どものころから、アフリカに行ってシュバイツァーみたいに医療貢献できることを夢みていた。40年前、ケニアに行って2年余り、診療経験をした。あらゆる手術をした。患者は遠いところからやってくるし、こちらが飛行機で飛んで行ったりした。柴田氏の医療の原点「生(活)きる力は患者から、成長の源」はこの時の思いの結晶だ。

帰国後、呼吸器外科に従事し、患者から「患者を中心に各医療関係者が信頼関係を作り、診療にあたっていくことが重要」と感じたという。患者と医療関係者の橋渡しとしてLOVE運動を提唱している。

LOVEとはすなわち、Listen(患者の話を共感を持って傾聴する)のL、Overview(人間の尊厳を第一義に全体を俯瞰する)のO、Voice(心の交流を醸し出す話し方)のV、Excuse(許し許され合う信頼性の確立。恕、慈)のEだ。患者と触れ合い、そこから人間の尊厳にたどり着いた。